
無題 3 2 1 5 4

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無題32154

【Nコード】

N7244X

【作者名】

宇ノ鹿 すい

【あらすじ】

ああああああああああああああああああああ。

僕は今日の陽が差し込まれてくる時間帯に音について新たな認識を持った。いままでは僕は音というものに対して感じていたことが、ひとことで言うてしまうと纏まりだった。集合体であって、その集合だけで完結されているものだと思って、音ひとつひとつ自体が景色にもなっているんだということは知らなかった。思いもよらなかったんだ。

でも今日ね、声の無い、失敗がない録音された音の集合体を聞いている途中にさ、ほら楽器ひとつひとつのかき鳴らすそれらの音が、景色を生み出してきて、雫が葉からこぼれるとかいう何ともありきたりな景色を思い起こしてしまったんだ。でも瞬間瞬間のことさ。所詮、僕なんてその程度のものでね、何時だって安定していなくて、さっきまではこうだと思っていたことを、次には否定してしまっていたりする不安定だ。で、今はこういう四方面を灰色の壁で覆われている、淡い西洋のただ中に放り投げられてしまっているような気がする。

実際にここは何処かは、わからない。目を開けたらこの灰色の壁や、色鮮やかな子供の喜びそうな玩具ばかりが転がっている牢獄のような、窓が高くて格子がかかっていて、それが陽の日差しに縦の模様を作って縞々なかんじさ。僕はそこに馬のぬいぐるみを置いて、シマウマを即興で製作してみた。で、こんな程度のことをしようよいうな自分自身の軽薄さに呆れるて、空しくなったりする。ただ床に転がっている子供が喜ぶような玩具は僕は嫌いで、あんまり楽しそうでもないから、適当に蹴っ飛ばしたりしている。

娯楽がたくさん溢れている充足された世界の中で、まるで百年前の子供たちが喜ぶような工夫しかしていないように見える玩具を与えられているのは、本当に屈辱的というのかな、僕がなさけない愚かな人間だということを叩きつけてきたようで、つまり喧嘩を売ら

れているとかいう野蛮な格好悪い言葉を言いたくなるような行為をされているんだ。でも誰がこんなことをしているのかはわからないんだよね。例えば、この牢獄のような灰色と子供の玩具の部屋には、訪問者は日に一人しかない。何処か砂漠の民族という雰囲気、仮面をつけた、わざとみずばらしい格好をしているらしき仮面の人々が毎日くるんだ。来て僕が生きるための御飯や、新しい玩具、そういうものを置いて、置くだけで、立ち去っていく。言葉をかけられた覚えはないな。また同時に、僕が言葉をかけた覚えもない。何をされるかわからないからね。仮面のそいつは物々しい斧を持っていた恐ろしいから話掛け辛いのだ。下手に怒らせて斧で惨殺されるなんて、ごめんだ。

それにしてもお腹が減ってきた。今は陽が落ちそうな時間帯でね、外のおそらく西洋世界では今頃お仕事という義務のようなそれを終えた人々が、朱色の夕焼けを背にそれぞれの自由を謳歌するための歩行を始めていることだろう。そんな時間だ、僕だってお腹ぐらひは減る。どうか仮面の人に、早く来て欲しいものだ。でもいつも、陽が落ちてからそれはやってくるんだよね。この時間帯には僕は、することも、されることもない、完全に社会的に一人となれている孤独もあり、幸福でもある時間なのだろうさ。この灰色に塗れて、自分自身も灰色に染まってしまえばいいのだと自惚れることが出来るほど、ここでは他者からの干渉がない。自分の世界に浸れと脅迫されているかのような、圧倒的な孤独の環境だよ。なんでここにいるのか、僕は理由を知らない。記憶は壊されているらしくて雑音混じりのテレビから流れるザー、ザー、の砂嵐になっているからさ。どういう理由でこうなっているのか、僕は知らない。知ることも、仮面の人斧をまず降ろしてくれなきゃ、何も知ることとはできないんだだろうから、そうなるかとふと閃いたけど、玩具で何かを探った方がいいのかもね。ここには玩具がたくさん転がっている。色とりどり、形も様々、使用の仕方も様々な玩具たちは、ここでずっと転がっていて、埃を被っているんだ。でも埃を被らせているだけじゃ存

在意義が無くて可哀想だから、少しはいじくってあげた方が良いかもしれないから、うずくまって手を伸ばしてみるんだ。まずは赤い牛みたいな玩具だね。かくかく首が不安定なその玩具を、両手の十本の指で支えて、僕の目の前に持ち上げてやって、夕陽の差し込まれてくる光をそれに重ねてあげる。赤い牛は光を得て、水を得た魚とはいかないで、ただ首をかくかくさせるだけだけど、生き物になってくれたように見えて、ひとりで退屈なこの部屋にいるから発生する僕の孤独感を紛らわしてくれてはいるかもね。でも、それってつまり一人じゃなくなるってことだ。

僕は今は一人が良い。だって腹も減っているし、音について閃いて僕の存在意義に意味を持てたような気がして心地よい時期なんだ。一人について、孤独はあるけど心地良い気持ちをも味わってもしいる時間帯なんだ。だから赤い牛が首をかくかくさせることは、僕にとっては嫌な風景だな。そういえば音の景色だなんて、楽しい話をしていたものだ。もう楽しくないかもしれない。でもゴミ箱に捨てるなんて汚いことは言わないさ。そんな偉そうなこと、よくできるものだ。でも僕は今一人だからそうやって自信を持って言えるけど、大勢の前で一緒に生きていく時には、偉そうなことなんて勇気を振り絞るか鈍感になるかしなきゃ、できやしないことだよ。ああ、赤牛はもう置こう。丁度夕焼けも沈みはじめて、玩具たちも色を無くしていく。僕も色を無くしていく。灰色の壁たちも、床も、天井も。いや、目が慣れれば青白い夜の世界に包まれるのだろうけれども、今はまだ、目が慣れるまでは色を無くすということだからね。僕は何を言っているんだろう。非生産的な思考を繰り返しても、得にはならないし誰かを楽しませたりできない。仮面の人が悪いんだ。或いは、この牢獄に僕を閉じ込めた存在が悪いんだ。仮にそのことをクズと名づけよう。いや、違うな、NOと名づけよう。これも違う。牢と名づけよう。甲と名づけよう。ああ、甲ということにしよう。甲が悪いのだとして、じゃあ僕は乙だろうか。でも今は甲に文句を考えることは止めよう。飯が仮面の人によっ

て運ばれてきた時にそれは考えることにしよう。そもそも僕には甲の見当なんてまったく付かないんだ。少なくとも個人ではない。甲には僕自身のことも含まれているような気がするし、世界全体が内包されているような気もする。つまり手強い奴なんだ甲は。つかみづらい靄みたいなので、ああいやだなということなんだよ。考えるのは面倒だ。様々な知識を得て、編集し、纏めて、文章化する、という行為を何年も掛けてようやく手触りくらいはわかるようになるのが、きっと甲に違いない。輪郭をわかること自体が難易度の高い存在がそれだとしたら、まったくもって一番厄介なのは、そういうわかりづらい存在の甲を認識してしまおうとする乙たる僕自身で。僕は馬鹿で阿呆たる乙であると感じてしまうのは、あまりに愚かだからだ。必要がない存在を認識してしまうのは、あまりに愚かだからだ。实际的に甲に深い痛みを負わされた訳ではないのに、实际的に与えられた苦痛というのは、総量としてはおそらく、世間一般程度のレベルだったに違いないのに、僕はそれを深く深く僕自身の中に根ざしてしまった。だから甲乙の関係性はいつになっても消えないままに、灰色の牢獄の中においても空気越しに繋がってしまっている。あの鉄格子の向こう側に果てしなく広がっている甲、そしてここにいる甲の一部でもある乙。音を景色だとかいったさつき。赤い牛で暇つぶしをしたさつき。

ため息をついた。とても深く、ため息をついた。

そして黄色いキリンの大きなぬいぐるみを尻に敷いて床に座ることにした。とても静かだ。ほぼ無音と言っても良い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7244x/>

無題 3 2 1 5 4

2011年11月15日15時04分発行